

# anarchosの光茫

フランス革命と民衆の闘い

フランス革命の火は10年間に亘って燃えた。革命の一層の深化に進む意志と、それを扼殺しようとする力との相剋の過程に、いく度か、(反・権力an-archos)としてのアナキズムの光がみとめられる。

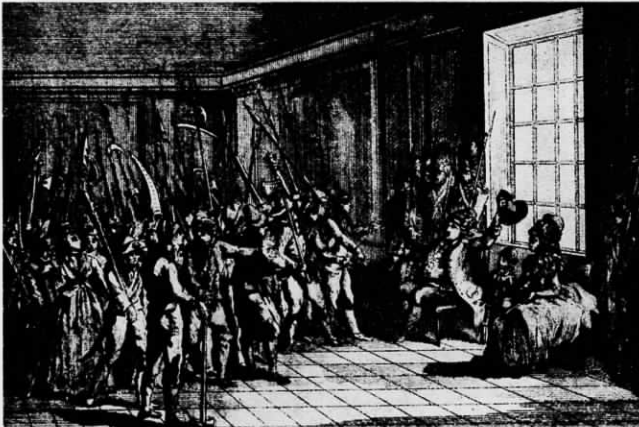
バスチーユ占拠。1789年7月14日、パリの民衆は専制主義の象徴バスチーユを襲撃した。

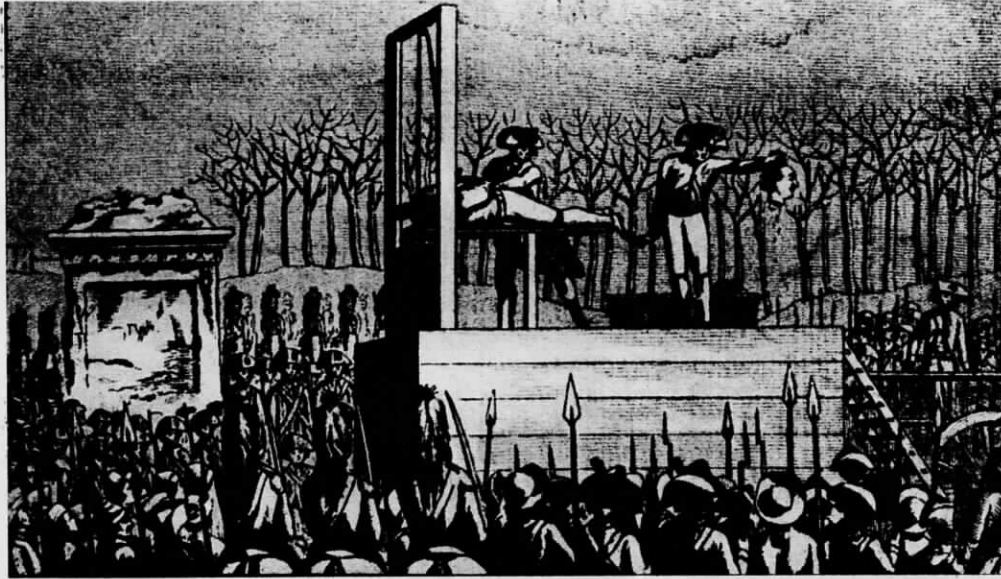
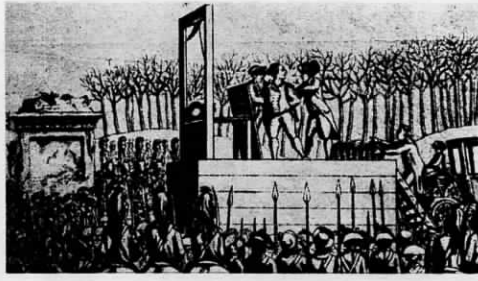


一七八九年七月二日財務長官フーロン(左)とパリ地方総監ベルテ  
イエを処刑。外灯は民衆が反革命分子を処刑する刑場となった。

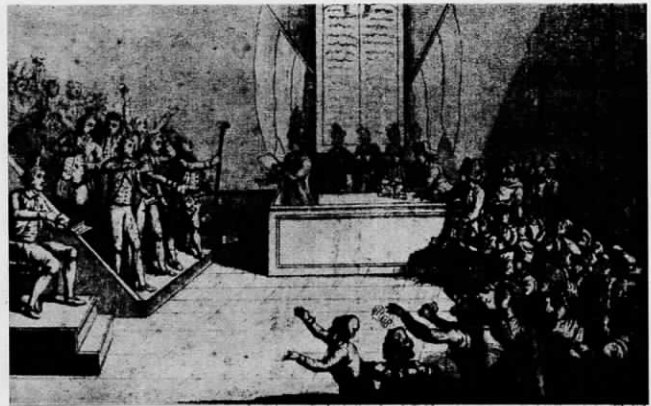


九月の大虐殺。一七九二年九月二日アベイ監獄(左上)、カルム監獄(右上)、ラ・フォルス監獄(右  
下)の宣誓忌避僧侶及び反革命密疑者を革命的国民衛兵等が処刑。左下は一七九二年六月二十  
日爆末町の民衆に押しかけられたルイ十六世が赤い帽子をかぶり「国民万才」と叫ぶところ。



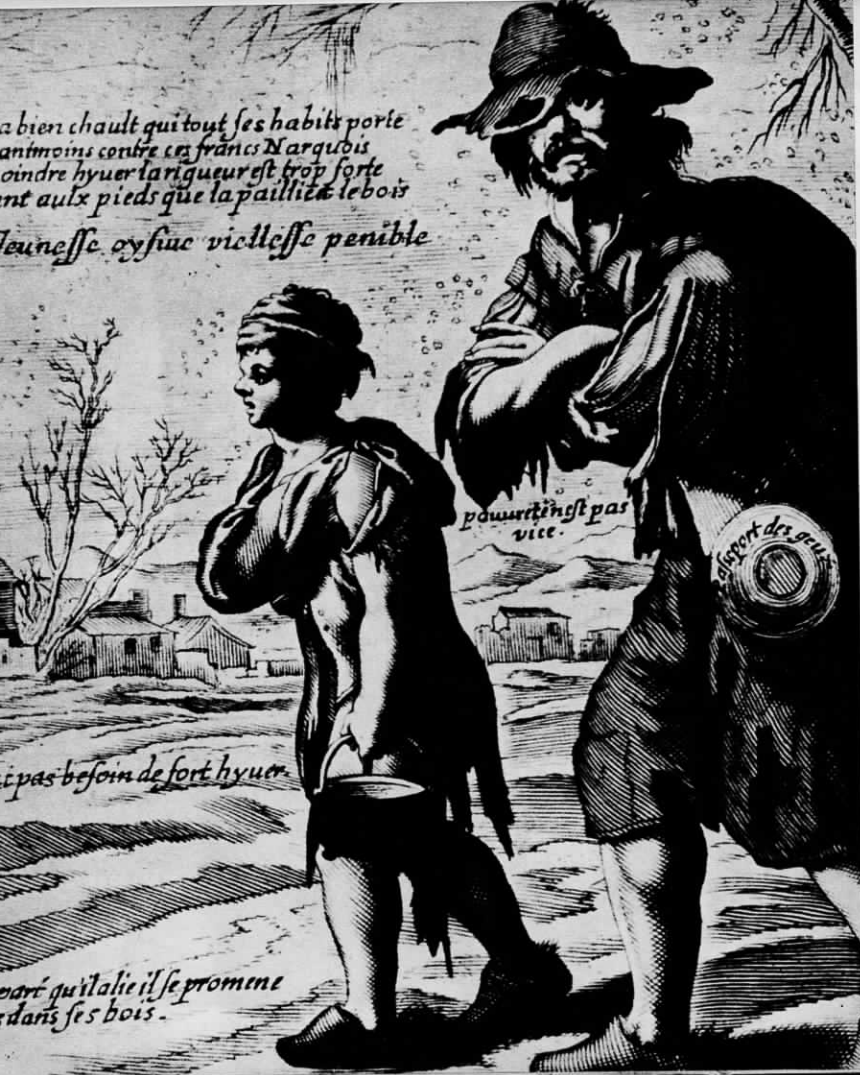


ルイ十六世の処刑。民衆は国王をコンコルド広場に連行し(上左)、処刑(上右)し、その首を群衆に示した(下)。各図の左には、破壊されたルイ十五世の立像の跡が見える。



共和歴2年(1794年)7月28日、ロベスピエールはギロチンにかけられた。

1793年10月30日革命裁判所はジロンド派に死刑の判決を下した(上)。被告はアッシニア紙幣を投げ「友よ、われわれを救え」と叫んだ。翌日31日刑が執行された(下)。



十八世紀の乞食。貧困は十八世紀を通して、つねに深刻な問題で  
 題でありつづけた。革命に向うエネルギーの源でもあった。



1793年、フランス革命軍の兵士は、共和政を維持するために、平等派の  
 暴徒と戦った。この戦いは、革命軍の勝利をもたらしたが、同時に  
 恐怖政治の始まりでもあった。



バブーフは敗れた。平等派の蜂起挫折の直後に出まわった(反バブーフ)の版画。「無  
 頼漢」「過激派」「アナキスト」すなわち平等派(中央)の陰謀にとどめを刺す兵士(左)及  
 び輝かしい祖国を象徴する母親(右)。まわりに行政機構と県名等が環をなしている。